

微笑

夢野久作

青空文庫

それは可愛らしい、お河童かっぱさんの人形であつた。丸裸まるはだか体のまま……どこをみつめているかわからないまま……ニツコリと笑つていた。

……時間と空間とを無視した……すべての空虚を代表した微笑であつた。

……真実無上の美しくしさ……私は、その美しくしさが羨ましくなつた。云い知れず憎々しくなつた。そのスベスベした肌の光りが無性に悲しく、腹立たしく、自烈じれつ度たくなつた。

その人形を壊してしまいたくなつた。その微笑をメチャメチャにしたくなつた。私は人形を抱き上げて、静かに首をねじつて見

た。するとその首は、殆んど音も立てないで、ポツクリと折れた中から、竹の咽喉のどふえ笛がヒヨイと出て来た……人を馬鹿にしたように……。

私は面白くなった。

拳固げんこを固めてポカリと頭をたたき割ったら、鋸屑おがくずの脳味噌がバラバラと崩れ落ちて来た。胴を掴み破ると、ボール紙ろっこつの肋骨が飛び出した。その下から又、薄板の隔膜と反故紙ほごがみの腸があらわれた。手足をポキポキとヘシ折ったら、中味は灰色の土の肉ばかりで、骨の処ところは空虚うつろになっていることがわかった。

けれども人形は死ななかった。何もかもバラバラになったまま、可愛らしくニコニコしていた。

私はいよいよ苛^{いらだ}立たしくなった。人形の破片^{かけら}を残らず古新聞に包んで、グルグルと押し丸めて、庭の隅のハキダメにタタキ込んだ。……こんな下らないものを作った人形師^{のろ}を咀^くいながら………

その古新聞紙はハキダメの中で雨にたたかれて破れた。メチャメチャになった人形^{ガラス}の手足が、ゴミクタの中に散らばった。その中から可愛らしい硝子の片眼^{ガラス}だけが、高い高い青空を見詰めながら、いつまでもいつまでも微笑していた。私はずっと後になってそれを発見した。そうして何かしらドキンとさせられた。

私は履物の踵^{かかと}で、その片眼を踏みつけた。全身の重みをかけてキリキリと廻転した。

白い太陽がキラキラと笑った。

青空文庫情報

底本：「夢野久作全集3」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年8月24日第1刷発行

底本の親本：「日本探偵小説全集 第十一篇 夢野久作集」改造社

1929（昭和4）年12月3日発行

入力：柴田卓治

校正：しず

2000年5月19日公開

2003年10月24日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

微笑

夢野久作

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>